

上 京 遺 跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

上 京 遺 跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび茶室建設に伴う上京遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

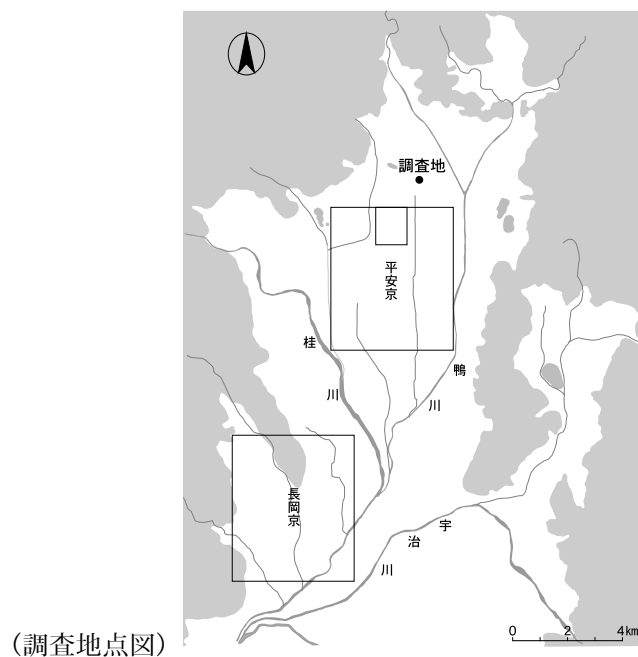
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成16年11月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 上京遺跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市上京区寺之内通新町西入妙顕寺町515-24他 |
| 3 委 託 者 | 財団法人 不審菴 理事長 千 宗左 |
| 4 調査期間 | 2004年 8月23日～2004年 9月16日 |
| 5 調査面積 | 約190m ² |
| 6 調査担当者 | 吉崎 伸 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「船岡山・相国寺・聚楽廻・御所」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 日本測地系（改正前）平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 検出順に通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 土器類、石製品、金属製品の順に通し番号を付した。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 16 本書作成 | 吉崎 伸 |
| 17 編集・調整 | 児玉光世・大立目 一 |



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査経過	2
2. 位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	3
(1) 基本層序	3
(2) 遺構の概要	4
(3) 平安時代の遺構	5
(4) 室町時代の遺構	5
(5) 江戸時代の遺構	9
4. 遺 物	9
(1) 出土遺物の概要	9
(2) 土器類	11
(3) 石製品	13
(4) 金属製品	13
5. ま と め	14
(1) 平安時代	14
(2) 室町時代	14
(3) 江戸時代	17

図 版 目 次

図版1	遺構	1	調査区全景（西から）
		2	SD12遺物出土状況（南から）
		3	SA14（西から）
図版2	遺構	1	SE18（南西から）
		2	SK59遺物出土状況（東から）
		3	SK56・57遺物出土状況（東から）
		4	SK28（東から）

図版3 遺物 出土土器類

図版4 遺物 出土土器類・石製品・金属製品

挿 図 目 次

図1	上京遺跡と調査位置図（1：10,000）	1
図2	調査前全景（西から）	2
図3	調査状況	2
図4	遺構実測図（1：150）	4
図5	SD12実測図（1：40）	5
図6	SA14・41実測図（1：100）	6
図7	SE8実測図（1：50）	7
図8	土壙実測図（1：30）	8
図9	土器実測図（1：4）	10
図10	石臼実測図（1：8）	13
図11	筭実測図（1：2）	13
図12	銭貨拓影（1：2）	14
図13	上京遺跡復元図（1：10,000）	15
図14	洛中洛外図（旧町田家本左隻の一部抜粋）	15

表 目 次

表1	遺構概要表	3
表2	遺物概要表	9
表3	出土銭貨表	14

上京遺跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

調査地は京都市上京区寺之内通新町西入妙顕寺町515-24他である。ここに財団法人不審菴は茶室を建設する計画を立てた。当地は上京遺跡に該当していたため、京都市埋蔵文化財調査センターは遺構の残存状況を確認するために試掘調査を実施した。その結果、中世の遺構が良好に遺存していることが明らかになり、不審菴と協議をし、発掘調査を実施する運びとなった。調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて実施した。

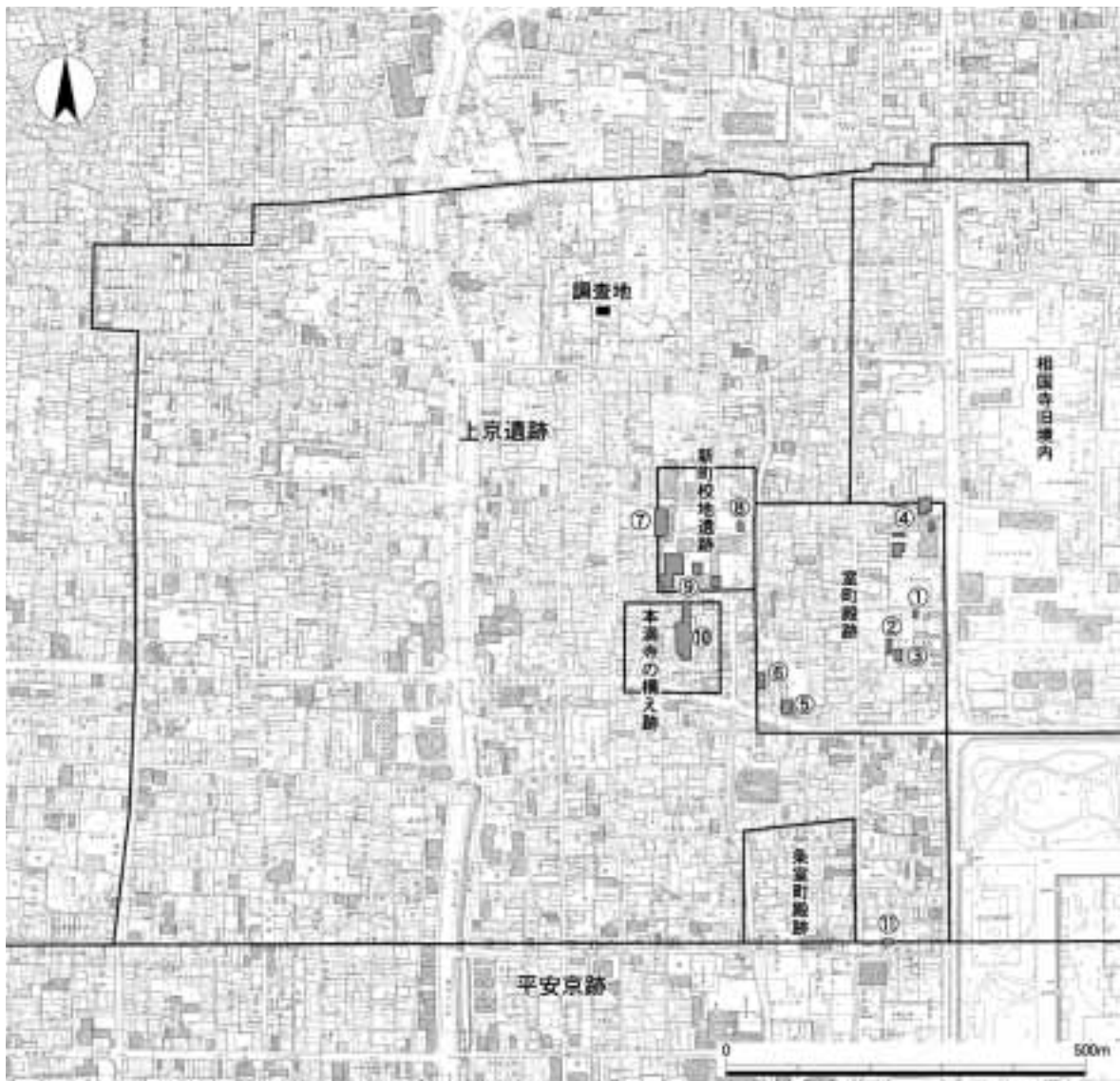


図1 上京遺跡と調査位置図 (10,000)

(2) 調査経過

調査は、試掘調査の成果から遺構密度が高いと想定される敷地の中央やや北東部分寄りに、約190㎡の調査区を設定し、中世遺構の状況を把握することに重点を置き実施した。2004年8月23日から重機掘削を開始し、江戸時代までの土層を除去した後、調査に取りかかった。そして、室町時代を中心とした柵、井戸、溝、土塋などの遺構群を検出、これを記録し、9月16日に終了した。

なお、調査期間中の9月14日には報道発表を行い成果の公表に務めた。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

上京遺跡は、室町幕府の中核部である御所や武家屋敷の建ち並ぶ中世の都市遺跡として、平成15年度新たに登録された遺跡である¹⁾。これは、平安京の北側に接し、東側には室町幕府三代将軍足利義満の発願によって創建された相国寺（相国承天禅寺）境内が広がる。北は上御霊前通、西は智恵光院通に囲まれた東西約1km、南北約1km、総面積約100ヘクタールにおよぶ遺跡である。

ところで、上京一带に分布する室町幕府に関連する主要な御所や邸宅跡の一部は、既に重要遺跡として遺跡登録がなされている。主なものは、永徳元年（1381）足利義満によって造営された室町殿跡（花の御所）、五摂家の一つであった近衛家の別邸（桜御所）を中心とした同志社大学の新町校地遺跡、寛元3年（1245）に造営された九条実経の邸宅で大永年間（1521～28）に一条家の所有となった一条室町殿跡などである。しかしながら近年来、中・近世遺跡の調査研究の重要性が認識されつつあること、これまでの調査例からこの付近の遺構が良好に保存されていることなどが考慮され、上京一带を遺跡として登録することになったのである。従って、広義には既に登録されている上記の御所や邸宅跡も含めて「上京遺跡」といっても差し支えなかろう。

さて、今回の調査地は上京遺跡の中央北寄りに位置している。詳しくは後述するが、室町時代の上京一带の状況を示す資料として著名な『洛中洛外図』から推定すると、調査地は室町幕府の



図2 調査前全景（西から）



図3 調査状況

管領細川氏の嫡家にあたる細川典厩家の邸宅に当たるものと考えられる。

(2) 既往の調査

上京遺跡は登録されて日が浅い遺跡であるが故に、下水道の敷設や民家の建て替えなどに伴う立会調査以外に調査例がない。しかしながら、上述した既に遺跡として登録されている御所や邸宅跡に関してはいくつかの調査例がある。

まず、室町殿跡では、遺跡の東部（¹）において1986年の調査で室町殿の庭園に伴う景石や礎敷き遺構を検出している。また、その南西（²・³）において1985年と1989年の調査でも庭園に伴う景石や築山を検出している。1989年の調査ではこの他に東西方向の溝を検出しており、これが室町殿の南限を示すものとみている。遺跡の北東部（⁴）では2002～2003年に同志社大学学生会館の建て替えに伴って調査を実施し、調査区の北側で東西方向の石敷き遺構を検出している。この石敷きについては室町殿北限築地の基礎の可能性を指摘している。このほか遺跡の南東部（⁵・⁶）では上京区役所の建て替えに伴って調査を実施したが、室町時代から桃山時代の土壌や溝を数基検出した程度にとどまっている。これらの調査によって室町殿の範囲や内部に展開する庭園の状況が明らかになりつつある。

新町校地遺跡では1974年に遺跡の西部（⁷）で、1993年に東部（⁸）で、2004年には南部一帯（⁹）で同志社大学新町校舎の建て替えに伴ってそれぞれ調査を実施している。その結果、石敷き遺構や塀跡を検出し、近衛邸の範囲や内部の構成が徐々に明らかになってきている。

また、平成15年度新たに遺跡登録された本満寺の構え跡（¹⁰）では2003年の調査で、中世の構のものと考えられる溝や濠を検出している。

このほか、上京遺跡の南東隅（¹¹）では1980年に平安京跡の調査に伴って、室町時代の東西方向の大規模な濠状遺構を2条検出している。

3. 遺 構

(1) 基本層序

調査区の基本層序は現地表から約10cmまでが現代の整地層、その下に江戸時代の整地層である

表1 遺構概要表

時 代	遺 構
平安時代(後期)	溝(SD12)
鎌倉時代(後期)	柵列・塀(SA14・15・41)、井戸(SE8)、土壌(SK10・16・18・19・28・56・57・59・60・70)、溝(SD17)
江戸時代	土壌(SK4～6)

暗褐色砂泥層（10YR3/3）が20cm前後ある。以下は基本的に無遺物層の地山となり黒褐色砂泥層（10YR3/2）、黄褐色砂泥層（10YR5/6）の順に続く。この内、黒褐色砂泥層は下層の黄褐色砂泥層がくぼんだ部分にのみ堆積しており、調査区全域には及んでいない。中世以前の遺構は、基本的に無遺物層である黒褐色砂泥層や黄褐色砂泥層の上面に展開する。しかしながら、今回の調査では黒褐色砂泥層を上層の暗褐色砂泥層と同一のものと誤認して掘削したために、大半の遺構を黄褐色砂泥層の上面で検出することとなった。

（2）遺構の概要

検出した遺構は平安時代、室町時代、江戸時代のものがあり、総数は83基である。

平安時代の遺構は後期の溝をわずかに1条確認したにすぎない。

室町時代の遺構は今回最も多く検出した。大半が後期（16世紀前半）のもので、重複関係や配置の状況から、これをさらに新・旧2時期に分けることができる。

旧期の遺構としては調査区の東部に南北方向の溝（SD17）があり、この東側には並行して柵列

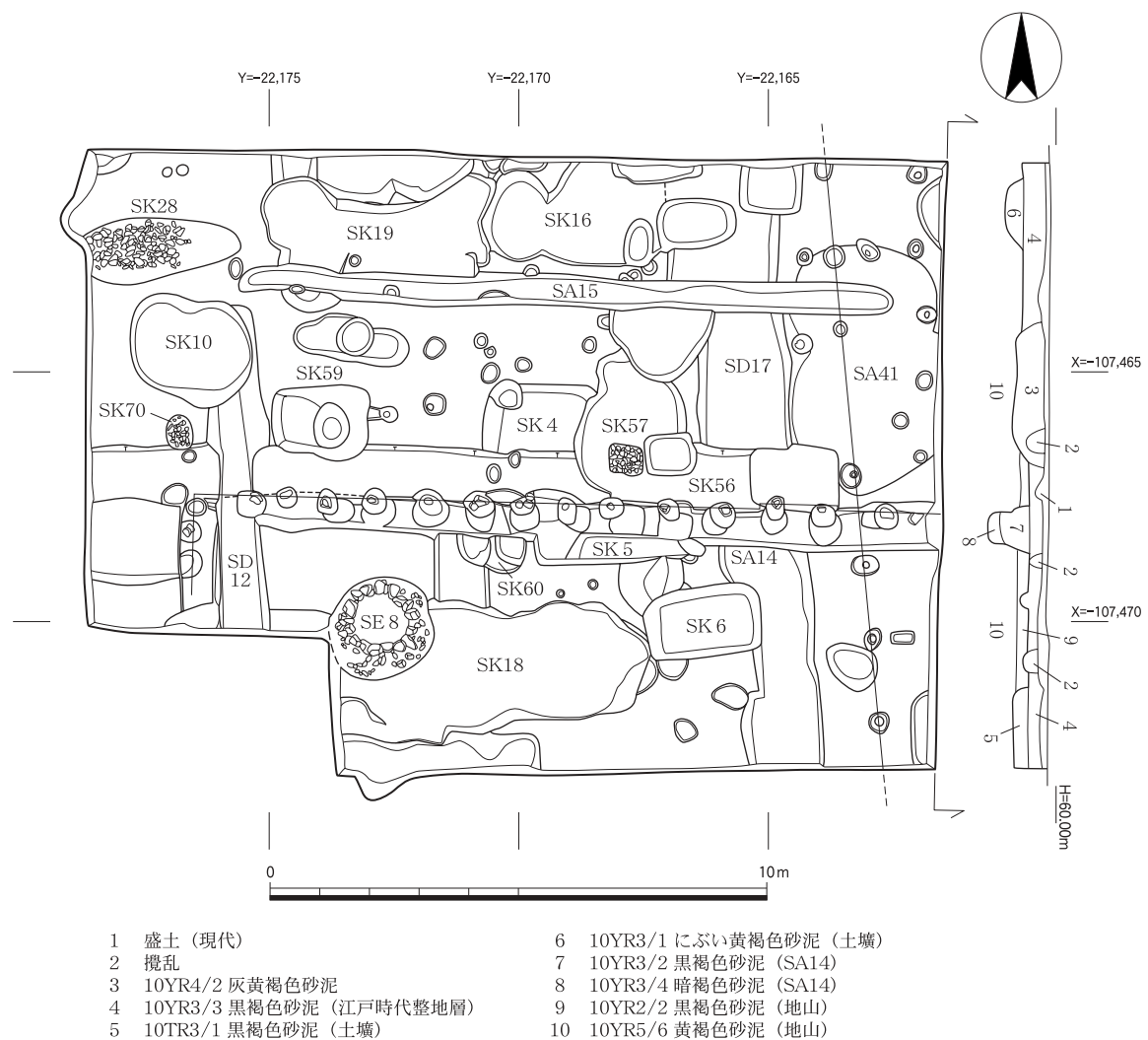


図4 遺構実測図（1：150）

(SA41)がある。またこれらの西側には土壌群 (SK16・18・19・60) が分布している。この時期の遺構は主軸が真北に対して北で西に振れる特徴がある。これに対して新期の遺構はほぼ正方位に向く。調査区の中央部では塀 (SA14) に伴う布掘掘形が東西方向に延び、調査区西部で南側へ直角に折れ曲がりさらに調査区外へ延びる。また調査区の北側にはこの塀と並行して東西方向の溝 (SA15) がある。柱痕跡は認められなかったものの、両端の状況や傾斜の状況からこの溝も塀に伴う布掘掘形と考えている。両者の間は約4mあり、この間が通路として機能していたものと考えられる。また、塀 (SA14) の南側には井戸 (SE8) がある。

このほかに土壌 (SK10・28・56・57・59・70) や柱穴が多数存在しているが、重複関係や配置の状況からは新旧どちらに属するか判断することはできなかった。

江戸時代の遺構は瓦溜め (SK4～6) などが主なもので、数は多くない。

(3) 平安時代の遺構

SD12 調査区の西部で検出した南北方向の溝で幅約1.0m、深さ約0.4mである。調査区の北部でとぎれ、南は調査区外へ延びる。底部中央部に溝の方向に沿って帯状に、土師器の皿を中心とした土器類が出土している。

(4) 室町時代の遺構

SD17 南北方向の溝であるが、真北に対して北で西に約6度振れる。幅1.5～2.0m、検出面からの深さ0.2mで、南北ともに調査区外に延びている。埋土は黒褐色の粘質土層が中心で、南半には拳大の礫が多く混入している。

SA41 南北方向の柵列で、上述の溝 (SD17) の東肩から東へ約1.0m離れて並行しており、同様に真北に対して北で西に約6度振れる。南北ともに調査区外に延びていると考えられる。柱間は1.5m前後である。柱穴はいずれも円形で直径0.3～0.5m、深さ0.1～0.2m、柱痕跡は径0.15m前後である。

SK16 調査区の北部で検出した東西約4.0m、南北2.1m以上、深さ10～30cmの不定形の土壌で、北側は調査区外に延びている。底部には凸凹があり、本来は1.0m前後の土壌が順次掘削と埋め戻しを繰り返された結果、全体としてこの規模になったものであることが判明した。埋土には炭化物を多く含んでいる。ここからは土師器の皿を中心とした土器類が比較的多く出土しており、焼締陶器など国産陶器のほか、中国製の青磁なども認められる。

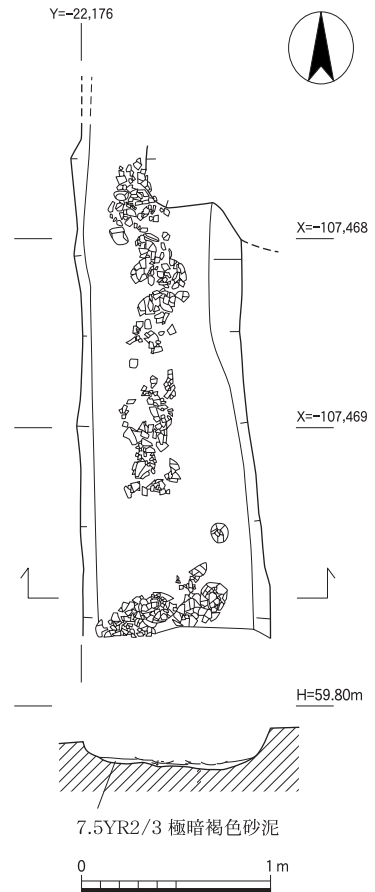


図5 SD12実測図 (1:40)

SK18 調査区の南部で検出した東西6.0m以上、南北2.2m、深さ0.3mの帯状の土壌である。後述する井戸（SE 8）に西部を壊されている。埋土には炭や灰が大量に含まれており、土師器を中心とした土器類が多く出土している。土師器の皿は大型の破片が多いが、完形に復元できるものは少ない。また、径10cm以上ある巻き貝の貝殻も数点認められる。

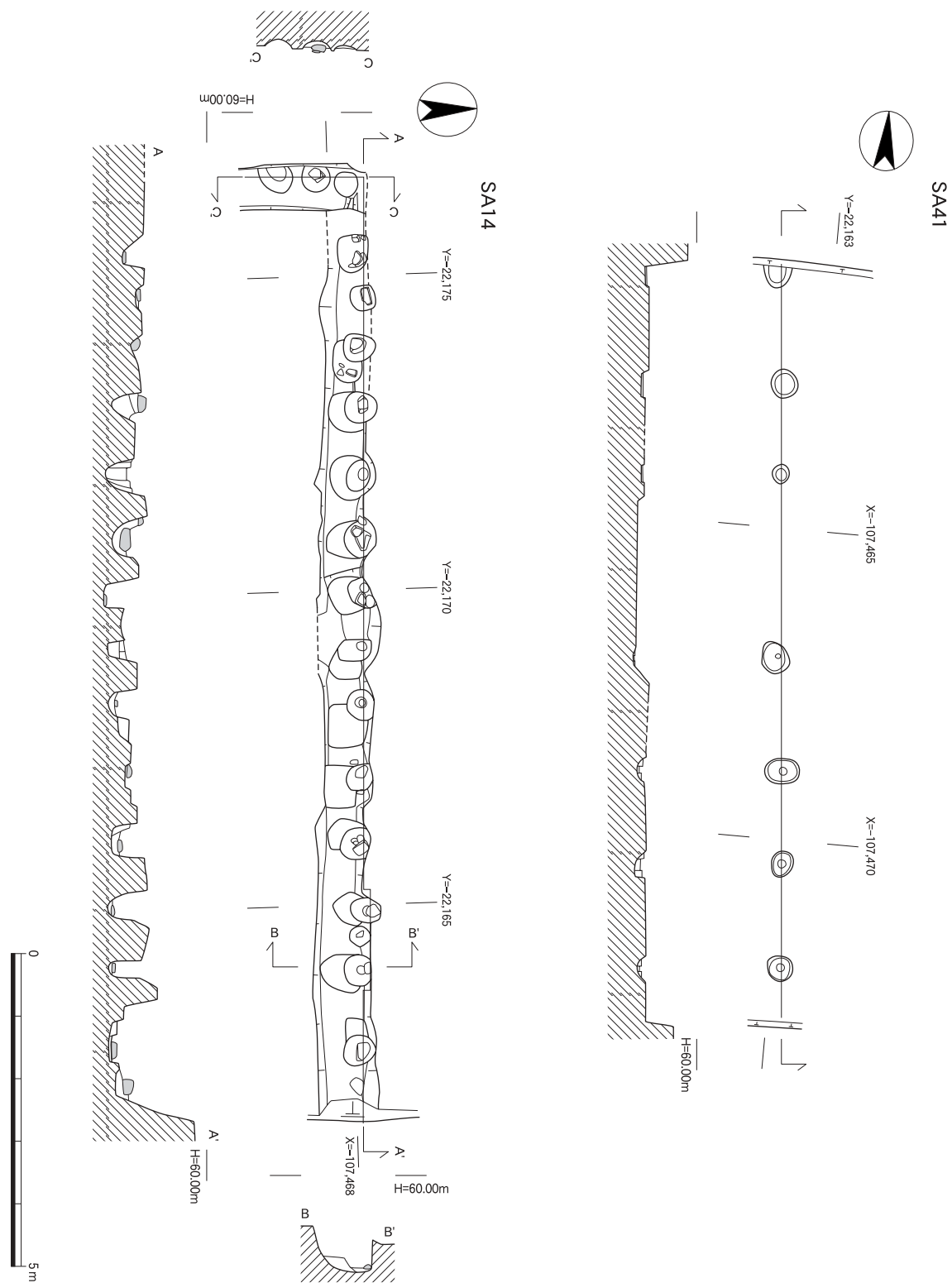


図6 SA14・41実測図（1：100）

SK19 調査区の北部で検出した東西4.5m、南北2.5m以上、深さ0.1~0.3mの不定形をした土壙である。東側に接した土壙（SK16）と同様に底面に凸凹があり、小規模な土壙が繰り返し掘削、埋め戻された結果この規模になったものと考えられる。南部を後述する塀（SA15）の布掘掘形に壊されている。埋土は土壙（SK16）とほぼ同じで、出土した遺物の内容も類似している。こうした事実から、両土壙は一連のものとの可能性が高い。

SK60 調査区の中央部で検出した土壙で、一辺約1.5mの隅丸方形で深さ0.3mのである。中央部を後述する塀（SA14）の布掘掘形に壊されているため、南北に分断されている。土壙の底部付近に大量の炭化物や灰を含む層があり、ここから土師器の皿を中心とした土器類が多く出土している。土師器の皿は完形品やそれに準じる破片が多いことが特徴である。

SA14 調査区の中央南側で検出した東西方向の溝状遺構である。東側は調査区外に延び、西側は調査区の西部で南側に直角に折れ曲がり、さらに調査区外に延びる。当初は溝として調査を進めたが、底部に柱穴や礎石を認めたため、布掘掘形をもつ塀の基礎であることが判明した。布掘掘形の規模は調査区東端で幅約1.0m、深さ0.8mであるが、西側に向かって浅くなる。掘形底部の北壁沿いには直径0.5m前後の柱穴がほぼ1.0m間隔に並び、大半のものはその底部に礎石が座っている。柱穴の大半のものに重複関係が認められ、一部は布掘掘形の北肩のラインよりもさらに北側へはみ出したものがあることから、後に通常の掘立柱式に柱を建て替えたものと思われる。

SA15 調査区中央北部で検出した東西方向の溝状遺構である。幅0.6m、深さ0.3mを測る。両端が突然立ち上がって止まることや、底部に傾斜がみられないこと、西端が上述した塀（SA14）の屈曲部に揃うことなどから、溝ではなく塀に伴う布掘基礎であると判断している。ただし、塀（SA14）より規模が小さく、底部に柱穴や礎石は認められないことから上部構造は異なるものと考えられる。

SE 8 調査区の南西部で検出した石組の井戸である。掘形は円形で直径約2.1mである。井戸側は人頭大の川原石を円形に小口積みにしており、直径約1.1mである。内部を検出面から3.2m程度掘り下げた時点で、安全対策上の理由からそれ以上の掘り下げを断念したため底は確認していない。埋土は黒褐色の砂泥層に炭化物や焼土が混じったもので、下部までほぼ均質である。ここから、土師器を中心とした土器類が多く出土している。

SK10 調査区の西部で検出した土壙である。やや

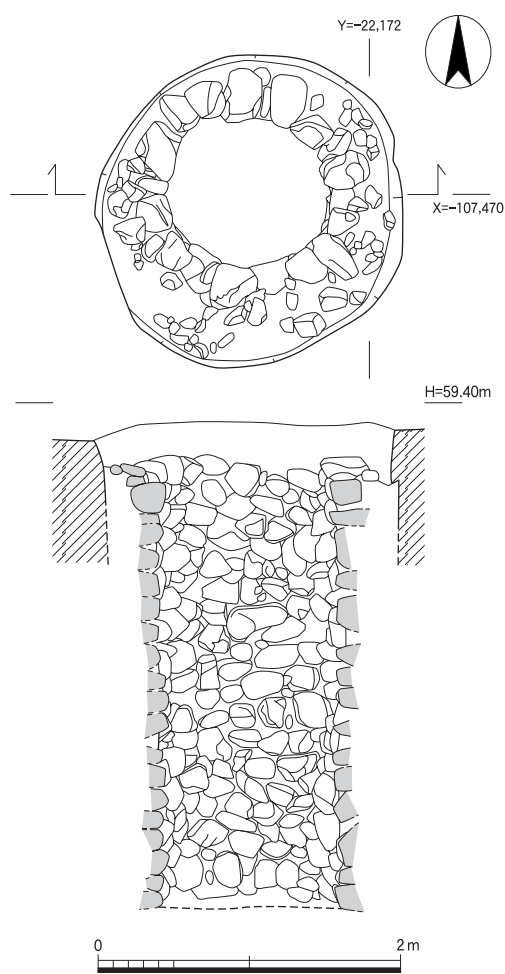


図7 SE 8実測図（1：50）

東西に長い楕円形の土壙で東西2.4m、南北2.0m、深さ0.3mを測る。埋土からは土師器を中心とした土器類が多く出土している。

SK28 調査区の西端で検出した集石土壙である。東西に長い楕円形を呈すると思われるが、西部は調査区外に延びている。東西3.0m以上、南北1.3m、深さ0.25mを測る。中央部に拳大から人頭大までの川原石を密に詰め込んでいる。

SK56 調査区中央部で検出した方形の土壙である。東西1.0m、南北0.8m、深さ0.5mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、上層からは拳大の礫と共に土師器の皿が大量に出土している。土師器の皿は完形やそれに準じる破片が多く、数枚重なったままの状態のものもあり。一括投棄されたものと考えられる。また、このほかに刀装具の筭が出土している。

SK57 上述した土壙（SK56）の西側で検出した方形の土壙である。東西0.7m、南北0.6m、深さ0.2mを測る。内部には拳大からそれよりやや大きめ礫を密に詰めこんでいる。

SK59 調査区中央やや西寄りで検出した円形の土壙である。直径0.7m、深さ0.7mを測る。埋

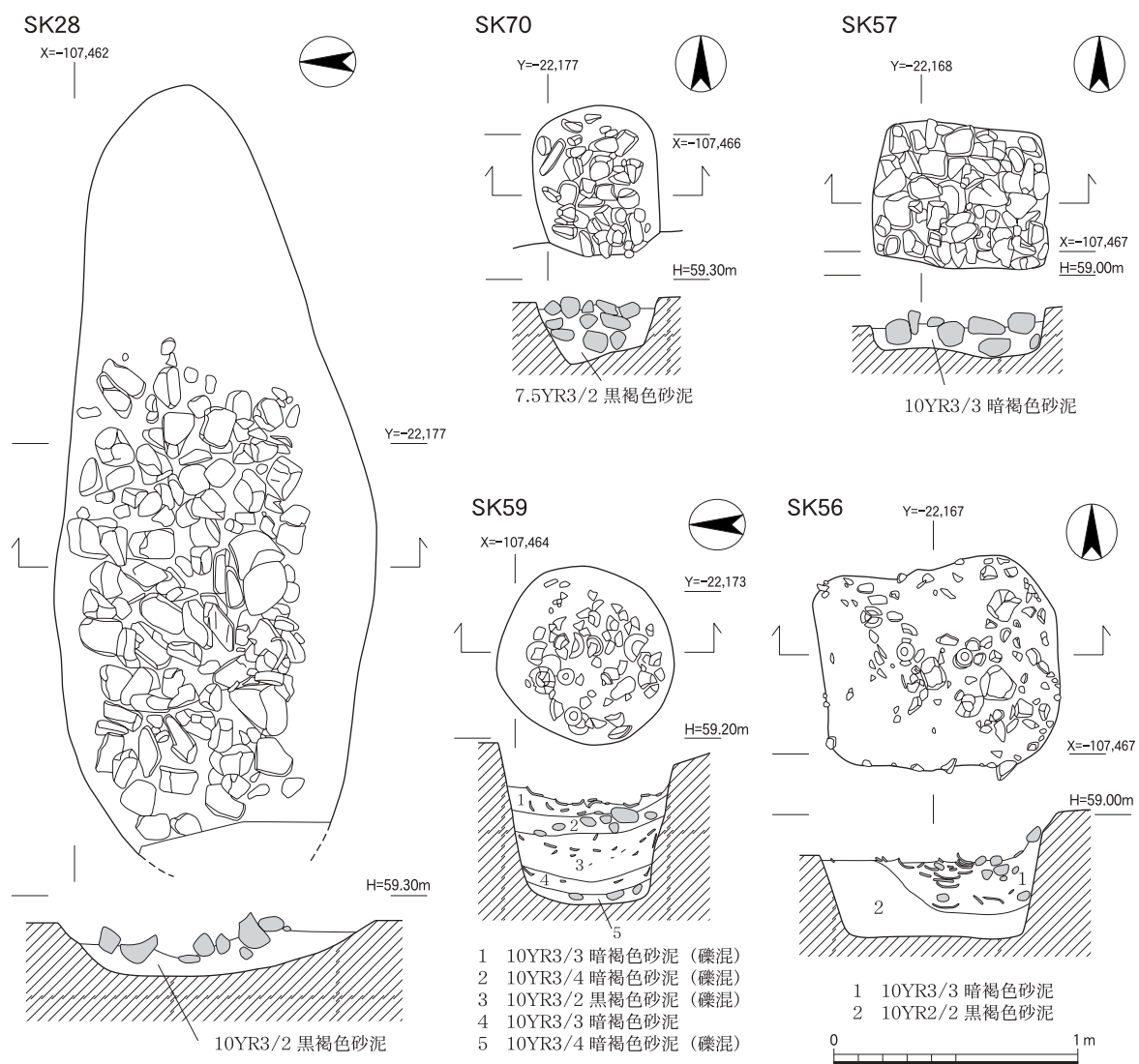


図8 土壙実測図（1：30）

土は拳大の礫を含んだ砂質のものと、大量の土師器の皿を含んだ粘質のものが交互に堆積しており、全体にしまりが無い。出土した土師器の皿は完形やそれに準じる破片が多い。

SK70 調査区の西部で検出した隅丸方形の土壌である。南端は現代の攪乱に壊されている。東西0.5m、南北0.6m程度、深さ0.25mを測る。内部に拳大の礫を密に詰めこんでいる。

(5) 江戸時代の遺構

土壌 (SK4～6) 調査区中央部で検出した土壌群である。いずれも一辺2～3mの方形をしており、内から瓦や壁土、土器類が大量に出土している。これらには被熱で赤変し、表面が泡立ったものが多く含まれている。

4. 遺物

(1) 出土遺物の概要

今回の調査では検出した遺構に対応して平安時代、室町時代、江戸時代の遺物を検出した。大半は土器類で、室町時代のものが最も多く、ついで江戸時代、平安時代の順である。

平安時代の遺物の主なものは調査区東部の溝 (SD12) から出土した後期 (12世紀中頃) の土器類である。その他に瓦や石帯の破片が中世の遺構に混入して出土している。

室町時代の遺物は井戸、土壌、溝などの各遺構から土器類が最も多く出土している。これらの

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器・瓦器・灰釉陶器	1箱	土師器2点	1箱	0箱
	平瓦				
	石帯(破片)				
室町時代	土師器・瓦器・瓦質土器・施釉陶器・焼締陶器・陶質土器・輸入陶磁器	16箱	土師器皿62点、施釉陶器1点、焼締陶器1点、陶質土器1点、輸入陶磁器1点	12箱	1箱
	平瓦・丸瓦・埴				
	墨書土器・石臼・筭・銭貨		墨書土器3点、石臼2点、筭1点、銭貨6点		
江戸時代	土師器・施釉陶器・焼締陶器・磁器	3箱		0箱	3箱
	鬼瓦・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦				
	鉄釘				
合計		20箱	80点(3箱)	13箱	4箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

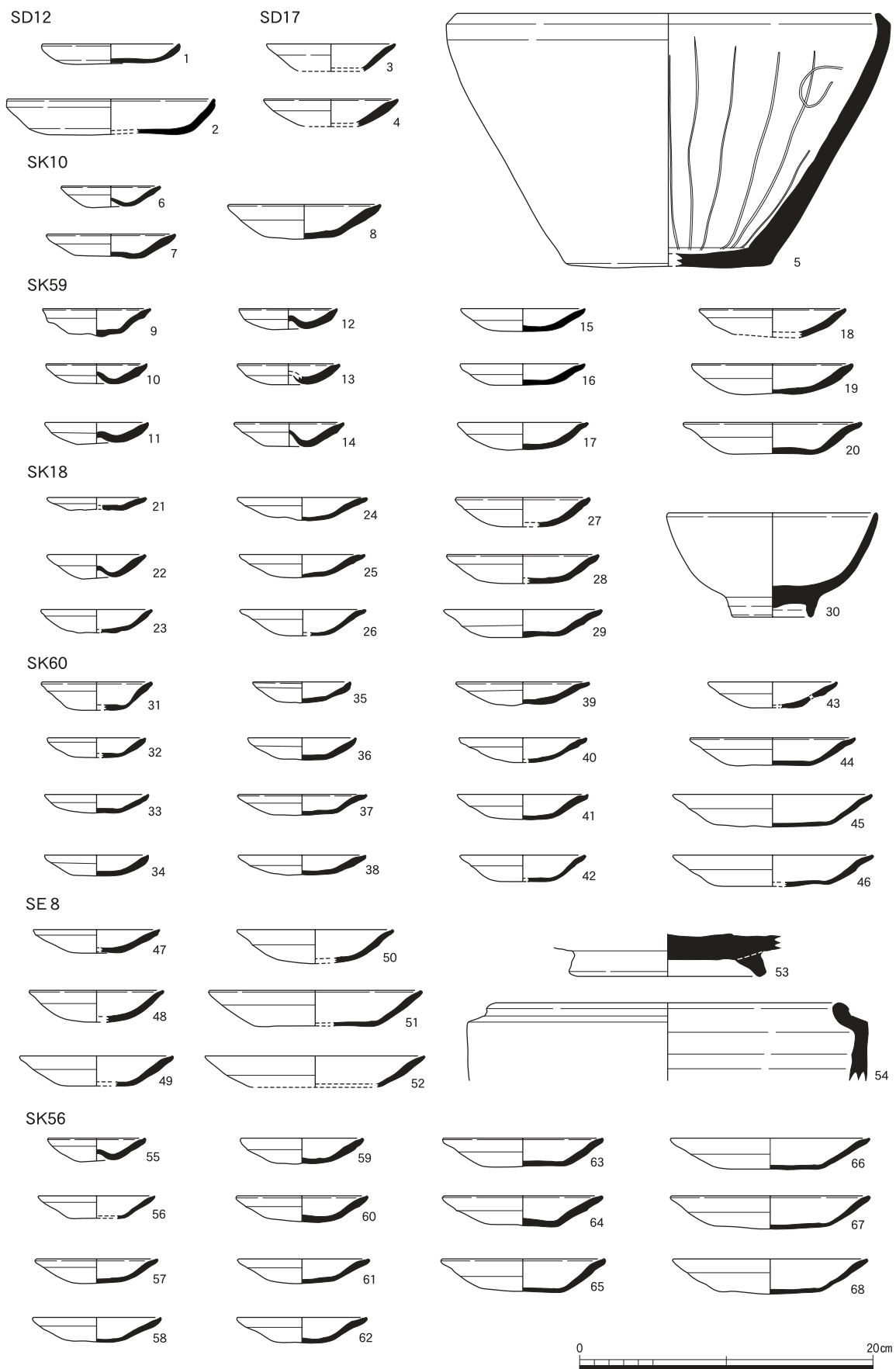


图9 土器实测图 (1 : 4)

時期幅は狭く、大半が室町時代後期（16世紀前半）に収まるものと考えている。出土状況の特徴としては、特定の土壙（SK18・56・59など）に集中する傾向がある。また、その大半は土師器の皿類であるが、施釉陶器〔美濃・瀬戸〕、焼締陶器〔備前、信楽、常滑〕、瓦質土器〔奈良火鉢〕も比較的多く、中国からの輸入磁器（青磁、白磁）も認められる。また、この時期の瓦類は少なく、軒瓦も認められないが、その中に瓦塼が一定量認められる。その他、石製品（石臼）、金属製品（筭）、銭貨、食物残滓（巻貝の殻）などもある。

江戸時代の遺物は土壙から瓦類（鬼瓦、道具瓦）、土器類（土師器、染付磁器、施釉陶器、焼締陶器）などが出土している。

（2）土器類

溝（SD12）出土土器 土師器（皿）、瓦器（椀）、陶器（甕）、瓦などが出土している。土師器（皿）以外の出土量は極めて少ない。土師器の皿は細分されており、図化できたものは小型のもの（1）と大型のもの（2）にとどまる。いずれも底部から口縁部にかけて内湾しながら立ちあがり、口縁部を横方向のナデで仕上げている。

溝（SD17）出土土器 土師器（皿）、土師質土器〔奈良火鉢〕、瓦器（鍋・釜）、施釉陶器〔美濃・瀬戸〕（椀）、焼締陶器〔常滑、丹波〕（播鉢・甕）、輸入陶磁器（青磁椀）などがある。土器類は土師器の皿が大半であるが、焼締陶器（播鉢・甕）も比較的多い。図化できた土師器の皿（3・4）は小型の皿で、共に直線的に外方に広がる体部から口縁部が残存している。体部外面はオサエ、体部内面から口縁部は強いヨコ方向のナデで仕上げている。丹波産の播鉢（5）は平らな底部から直線上に外方へ広がる体部、やや内湾する口縁端部からなり、内面にはヘラ状の工具で1本ずつ刻み込んだ播目が口縁部直下から底部まで施される。また、体部内面に同じ工具でつけたヘラ描き模様がある。底部は未調整、体部から口縁部内外面はヨコナデで仕上げている。

土壙（SK10）出土土器 土師器（皿）、瓦器（鍋・釜）、輸入陶磁器（青磁椀）がある。土師器皿（6）は小型で底部中央が内側に突出したいわゆる「へそ皿」である。土師器皿（7・8）は平らな底部からわずかに外反しながら広がる体部、口縁部からなる。小型のもの（7）とやや大型のもの（8）がある。共に底部外面はオサエ、体部内面から口縁部を強いヨコ方向のナデで仕上げている。

土壙（SK59）出土土器 土師器（皿）、瓦器（鍋・釜）が出土している。土師器の皿（9）は小型で小さく平らな底部、外反する体部、わずかに外反する口縁部からなる。底部から体部外面は指オサエによる凸凹が明瞭に残っており、口縁部内外はヨコ方向のナデで仕上げている。土師器皿（10～14）はいわゆる「へそ皿」で、内側に突出した底部、わずかに外反しながら広がる体部、口縁部からなる。体部外面はオサエ、体部内面から口縁部はヨコ方向のナデで仕上げている。土師器皿（15～20）は平らな底部、わずかに外反しながら広がる体部、口縁部からなる。小型のもの（15～17）とやや大型のもの（18～20）がある。共に底部外面はオサエ、体部内面から口縁部をヨコ方向のナデで仕上げている。

土壙 (SK18) 出土土器 土師器 (皿)、瓦器 (鍋・釜)、瓦質土器 [奈良火鉢]、施釉陶器 [美濃・瀬戸] (椀)、焼締陶器 [常滑・信楽・備前] (搦鉢・甕)、輸入陶磁器 (青磁椀) がある。土師器の皿 (21) は平らな底部に、わずかに外反しながら短く外方に立ち上がる体部、口縁部からなる。底部、体部外面はオサエ、体部内面から口縁部はヨコ方向のナデで仕上げている。なお、底部中央には焼成後の穿孔がある。土師器皿 (22) はいわゆる「へそ皿」である。土師器皿 (23) は小型の皿で底部から内湾しながら立ち上がる体部、口縁部からなる。底部から体部の外面には手のひらと思われるオサエの痕跡が明瞭に残り、体部内面から口縁部はヨコ方向のナデで仕上げている。土師器皿 (24～29) は平らな底部、わずかに外反しながら広がる体部、口縁部からなる。小型のもの (24～27) とやや大型のもの (28・29) がある。共に底部外面はオサエ、体部内面から口縁部をヨコ方向のナデで仕上げている。(30) は青磁の椀であり、底部外面には削り出しによる高台が付き、緩やかに内湾しながら立ち上がる体部、口縁部からなる。高台の内側を除く全体にオリーブ色の釉薬が厚く施されている。見込みの部分の生地に植物らしき文様が彫り込まれているが、判然としない。中国龍泉窯系の青磁である。

なお、この土壙から出土した土師器の皿には墨書があるものが3点 (69～71) 出土している。いずれもやや大型の皿の口縁部近くに墨書されたもので、

(69) 「観音」

(70) 「泉」

(71) 「□□」

である。

土壙 (SK60) 出土土器 土師器 (皿)、瓦質土器 [奈良火鉢]、施釉陶器 [美濃・瀬戸]、焼締陶器 [備前] などがある。土師器皿 (31) は小さな底部に、外反しながら立ち上がる体部、口縁部からなり、器がやや高い。体部外面には指オサエによる凸凹が明瞭に残り、体部内面から口縁部はヨコ方向のナデで仕上げている。土師器皿 (32～46) は平らな底部、わずかに外反しながら広がる体部、口縁部からなる。小型のもの (32～43) と中型のもの (44)、大型のもの (45・46) がある。(43) には体部に焼成後に穿孔している。いずれも底部外面はオサエ、体部内面から口縁部はヨコ方向のナデで仕上げている。

井戸 (SE8) 出土土器 土師器 (皿)、瓦器 (鍋・釜)、瓦質土器 [奈良火鉢]、施釉陶器 [美濃・瀬戸] (壺)、焼締陶器 [常滑・信楽・丹波・備前] (壺・甕)、陶質土器、輸入陶磁器 (椀・皿・壺) などがある。土師器皿 (47～52) は平らな底部、わずかに外反しながら広がる体部、口縁部からなる。小型のもの (47・48) と中型のもの (49・50)、大型のもの (51・52) がある。いずれも底部外面はオサエ、体部内面から口縁部はヨコ方向のナデで仕上げている。陶質土器 (53) は壺あるいは鉢の底部であると考えられるが詳細は不明である。底部外面には貼り付け高台が付く。全体に火を受け、赤変している。施釉陶器 (54) は美濃・瀬戸の壺である。肩部から口縁部のみが残存している。体部は垂直に立ち上がり、肩部はほぼ直角に内向し、口縁部は短く直立する。全体に緑黄色の釉薬が施されている。

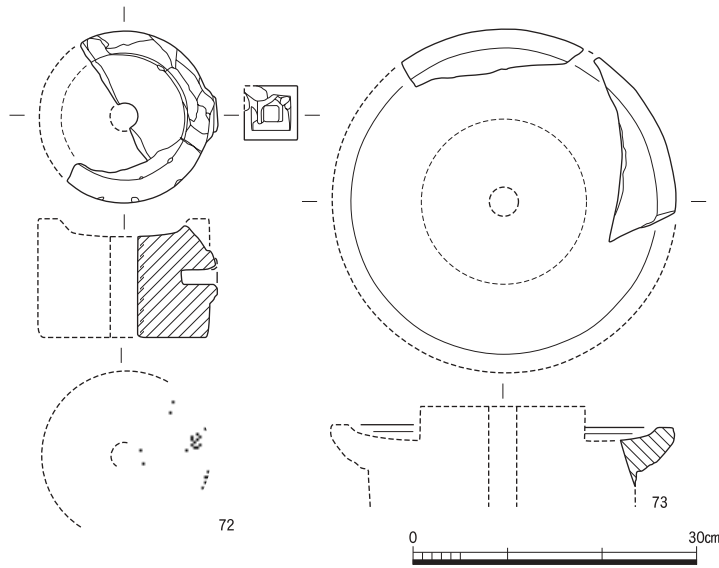


図10 石臼実測図（1：8）

土壙（SK56）出土土器 土師器（皿）、瓦質土器〔奈良火鉢〕、焼締陶器〔備前〕（播鉢）などがある。土師器の皿（55）はいわゆるへそ皿である。土師器皿（56）は外反しながら立ち上がる体部、口縁部からなる。体部外面には指オサエによる凸凹が明瞭に残り、体部内面から口縁部はヨコ方向のナデで仕上げている。土師器の皿（57～68）は平らな底部、わずかに外反しながら広がる体部、口縁部からなる。小型のもの（55～62）と中型のもの（63～65）、大型のもの（66～68）がある。いずれも底部外面はオサエ、体部内面から口縁部はヨコ方向のナデで仕上げている。

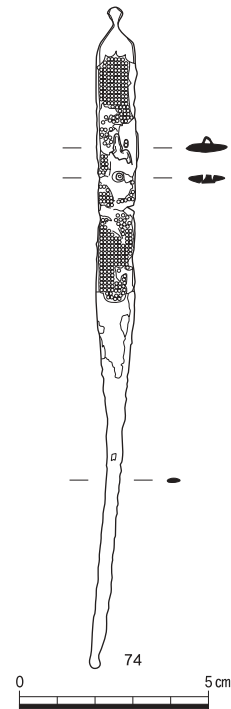


図11 筥実測図（1：2）

（3）石製品

石臼（72）は茶臼の上臼である。中央に円孔が貫通し、側方に方形の横打込穴がある。横内込み穴の周囲には方形二段の造出しがある。上面は皿状に窪め、底面には鋸歯文状の目を刻んでおり、かなり磨滅している。全体に被熱のため黒から褐色に変色している。石臼（73）は茶臼の下臼であるが周縁部の破片が残存しているにすぎない。上述の（72）と組み合わせさっていたものと考えられる。上面には皿状の受けが巡る。下面は石材の加工痕を粗く残しており、中央には高台の一部が残存している。共に室町時代後期の塀（SA14）の布掘掘形の柱跡から出土している。

（4）金属製品

筥（74）は刀装金具の一つで、元来は髪を整える理髪の道具である。金銅製で、頭部には小さな耳かきが付き、首は細く、なで肩である。胴部の上端に眉形、下端に木瓜形の切込みを入れ、中央を一段下げ、2個が1対の非常に細かい魚々子地としている。その中央には飾り金具を鎮止めしているが一部を残し欠損しているので意匠は不明である。腰部は緩い曲線を描きながら狭まり、筥は細長く、穂先は小さく丸まる。全面に塗金がされていたと思われるが、現状では痕跡を

表3 出土銭貨表

遺物No.	銭貨	鑄造国	初鑄年	出土遺構
75	嘉祐通寶	北宋	1056	土壙 (SK60)
76	治平元寶	北宋	1064	土壙 (SK 5)
77	元豊通寶	北宋	1078	井戸 (SE 8)
78	大観通寶	北宋	1107	土壙 (SK 5)
79	洪武通寶	明	1368	井戸 (SE 8)
80	永楽通寶	明	1408	土壙

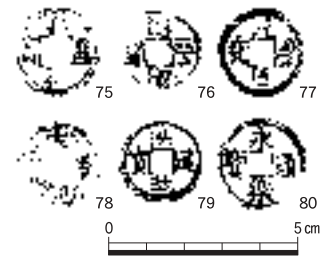


図12 銭貨拓影 (1 : 2)

とどめているすぎない。細工は全体に丁寧である。室町時代後期の土壙 (SK56) から出土している。

銭貨 北宋から明代の中国銭が室町時代後期および江戸時代の遺構から6点 (75~80) 出土している。

5. ま と め

今回の調査では室町時代後期の遺構を検出できたことが最も大きな成果である。上述したとおり、調査地周辺は室町幕府の中枢部である上京の埋蔵文化財を保護するために、上京遺跡として平成15年度新たに登録された遺跡である。今回はその最初の調査であり、まさにその時期の遺跡の一端を明らかにすることができたことの意義は大きい。また、合わせて平安時代や江戸時代の遺構も確認でき、当地の変遷を知る手がかりを得たことも成果である。以下時期ごとに調査の成果をまとめる。

(1) 平安時代

この時期の遺構としては調査区の西部で後期の溝を検出した。溝からは土器も多く出土しており、この周辺が居住域となっていることを裏付けた。当時は鳥羽離宮や六勝寺の造営あるいは法金剛院の造営など平安京の近傍が盛んに開発される時期にあたり、こうした影響が当地一帯にも及んだ可能性が考えられる。残念ながら、今回の調査では溝以外の遺構は検出できなかったが、今後周辺での調査には注意を促す成果といえよう。

(2) 室町時代

調査地の位置と遺構の性格

今回の調査で検出した遺構の大半は、室町時代後期 (16世紀前半) のものである。この時期の上京の状況を具体的に示す資料としては、『洛中洛外図』の一群がある。これらの内、旧町田家が所蔵し、現在国立歴史民俗博物館が所蔵している「旧町田家本」は16世紀前半、狩野永徳の筆により織田信長が上杉氏に送ったとされる「上杉本」は16世紀中頃の作で、当時の街並みをかなり



図13 上京遺跡復元図（1：10,000）



図14 洛中洛外図（旧町田家本左隻の一部抜粋） 国立歴史民俗博物館所蔵

正確に描いていることが近年の研究で明らかになっている¹³⁾。両屏風の左隻はいずれも同じ構図で上京周辺を描いており、「小川」が中央を左（北側）から右（南側）へ屈折しながら流れ、その周辺に武家屋敷や御所、民家が建ち並んでいる。図13は「旧町田家本」を参考に、現在の地形図に当時の街並みを復元したものである。復元の手がかりは小川の流れである。小川は一部が水無瀬川となって現存しているが、昭和30年代に大半が埋め戻され、現在は小川通と称する道路となっている。絵図では南流してきた小川が上立売通で東折し、しばらくして再び南折する。その北西の一画が室町幕府の管領細川氏（京兆家）の邸宅となっており、北側に隣接して典厩家がある。典厩家は細川氏の嫡家にあたり、代々右馬頭を官途としたので馬寮の唐名である典厩と称されている。典厩家の範囲に関しては西を小川通、南を寺之内通、北側を妙顕寺の塔頭である本妙院北側の道路と推定できる。東側に関しては、現在該当する通りはない。ただ、同志社大学の新町校地遺跡で検出した近衛邸¹⁴⁾の西限を延長した部分に道路を推定している。ここは妙顕寺のほぼ中央付近にあたるが、同寺は豊臣秀吉の京都改造に伴って桃山時代に当地に移転されたものであり、この時、道路を取り込んで寺域が設定されたものと考えられる。従って、この復元案からすれば、調査地は典厩家のほぼ中央付近に当たるものと考えられる。ちなみに、今回検出した遺構の年代（16世紀前半から中頃）の典厩としては、左馬頭を勤め典厩の由来となった細川尹賢もしくは、天文二年（1552）に右馬頭となり後を継いだ藤賢が該当する。

洛中洛外図によれば、典厩家邸宅は東側に正面の棟門を設け、敷地の北側に柿葺の主殿や付属屋が並び、南側には庭石や樹木を配した庭園が広がっている。今回検出した遺構からは、調査地が邸宅のいずれの部分にあたるかを知ることが困難である。しかしながら、遺構の構成からその性格を考察してみると、まず、旧時期の遺構に関しては、調査区の東部で検出した南北柵列（SA41）とそれに並行する溝（SD17）によって、何らかの境界がなされるものと考えられる。この東側は調査範囲が狭小で顕著な遺構もみられないため土地利用の状況を考察することはできない。一方、西側に関しては大小の土壙が多数存在している。特に大型の土壙（SK16・18・19）の埋土には土器類の破片が多く含まれること、炭化物や貝殻などの食物残滓が含まれるという特徴がある。こうした事実から、これらの土壙は塵芥を処理したゴミ捨て穴である可能性が高い。したがって、柵と溝の西側は日常生活に密着した空間を想定できよう。

次に新時期の遺構に関しては2列の布掘基礎をもつ塀跡を検出している。両者の間は約4mあり、ここを通路と考えている。南側の塀（SA14）については深い溝状の掘形の底部に礎石を据えるという特殊な基礎構造をもっていることが判明しており、この塀を境に全く異なった性格の土地利用がなされていたと考えられる。

また、この塀の基礎と同様のものが同志社大学が実施した新町校地遺跡でも2例検出されており、上京の武家や公家などの邸宅に広く用いられている可能性が高くなった。この塀の上部構造については明らかではないが、一つの可能性として、將軍邸の造営に際して作事奉行から幕府内談衆大館常興の元へ送られた書状、『大館常興日記』天文八年閏六月一日条にみられる「鯖板塀」と呼ばれるものがこれに相当するのではないだろうか。

出土遺物の性格

今回の調査では室町時代後期の遺物が最も多く出土した。土器類が主であり、中でも土師器(皿)がその大半を占める。この状況は中世京都の他の遺跡と大きくは変わらない。ただ、その中に日本各地で生産された陶器類や中国製の陶磁器類が一定量含まれること、青磁大皿などの優品が認められることは特徴的である。また、茶臼とみられる石臼、刀飾具の筭など当時の武家の生活習慣と密接に関係する遺物が出土したことは、当地が細川典厩の邸宅であるということを傍証していると考えている。

(3) 江戸時代

江戸時代の主な遺構は調査区中央部で検出した瓦溜めである。ここから出土した遺物は後期瓦を中心として陶磁器類、鉄製釘などのものがあり、いずれも被災した痕跡が残っている。調査地周辺は桃山時代に寺町として再編され、当地の東側には妙顕寺が、そして当地には塔頭が造営される。この妙顕寺は江戸時代後期に発生した「天明の火災」(18年)で堂宇の大半を消失した記録が残っており、今回検出した瓦溜めもこの火災に伴うものと考えられる。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局 2003年
- 2) 「室町殿跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
- 3) 「室町殿跡(RH18)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
- 4) 「室町殿跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 5) 「室町殿跡(同志社大学会館地点)の発掘調査 -よみがえる上京の歴史-」2002年9月1日(説明会資料) 同志社大学歴史資料館
- 6) 「足利義満室町殿跡(上京区役所)財団法人京都市埋蔵文化財研究所昭和54年調査 未報告
- 7) 「足利義満室町殿跡(上京区役所)財団法人京都市埋蔵文化財研究所昭和55年調査 未報告
- 8) 『同志社大学新町校地発掘調査概報』同志社大学校地学術調査委員会 1974年
- 9) 『上京・西大路町遺跡桜の御所跡隣接地点の発掘 -同志社大学育真館地点の発掘調査-』同志社大学校地学術調査委員会 1997年
- 10) 「近衛殿桜御所跡 -同志社大学臨光館地点の調査成果-」2004年7月10日(説明会資料) 同志社大学歴史資料館
- 11) 「中世上京の構と寺院 -同志社大学第1従規館地点(推定本満寺跡)の発掘調査-」2003年6月21日(説明会資料) 同志社大学歴史資料館
- 12) 「平安京左京北辺三坊五町」財団法人京都市埋蔵文化財研究所昭和55年調査 未報告
- 13) 今谷明氏は『京都・一五四七年 -上杉本洛中洛外図の謎を解く-』平凡社ライブラリー2003年刊の中で「上杉本洛中洛外図」について、その景観の研究から作成者は狩野永徳ではなく、製作年代も天文一六年(1546)とみている。
- 14) 10)に同じ。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみぎょういせき							
書名	上京遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2004-9							
編著者名	吉崎 伸							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみぎょういせき 上京遺跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 てらのうちどおりしんまち 寺之内通新町 にしいるみょうけんじちょう 西入妙顕寺町 515-24他	26100	224	35度 01分 51秒	135度 45分 25秒	2004年8月 23日～2004 年9月16日	190m ²	茶室建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上京遺跡	離宮跡	平安時代 (後期)	溝	土師器・瓦器・灰釉陶器・平瓦		検出した遺構群は細川典厩家の邸宅の一部とみられる		
		室町時代 (後期)	柵列・塀・井戸・土壇・溝	土師器・瓦器・瓦質土器・施釉陶器・焼締陶器・陶質土器・輸入磁器・丸瓦・平瓦・埴・石臼・筭・銭貨				
		江戸時代	土壇	土師器・施釉陶器・焼締陶器・磁器・鬼瓦・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鉄釘				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-9

上 京 遺 跡

発行日 2004年11月30日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961